

ぬ 盗んだものは倍返し

「盗んだものは倍返し」とはおだやかでないタイトルだ。そもそも「盗む」のはいけないことだと誰もが言う。しかし、そうとばかりは言えない。職人の世界では、よく親方から「技は教えられるものではなく盗むものだ」言われるようだ。さて、まちづくりではどうだろう。

問題を解決するための手法はケースごとに違ってくるので、その都度いろいろ知恵を絞る必要がある。全てのケースに対応できる万能手法があれば良いのだが、それはない。かといってひとつひとつ手法を一から考えていては現場の進むスピードに追いつかないこともある。そこで、先輩や同輩が苦労して生み出した手法を盗むことになる。ケースは違うものの、課題に対する自分の問題意識や、それに対してこういうやり方はどうだろうかと考えているものは、きつとどこかで誰かが同じようなことを考えているものだ。それを盗むのだ。「学ぶ」といつても良いのだが、盗むと言う方がしつくりくる。盗むというと、それを是が非でも自分のものとしたという強い意思がなければならぬ。まちづくりで「盗む」ということは、現場がかかえる課題に対する強い問題意識や課題解決への思いがなければならぬ。そこには「学ぶ」という言葉にはない切迫した姿勢があるかどうかが問われる。ましてや単に「真似る」ということではない。

盗んだら返さなければならぬ。まちづくりプランナーとして長年試行錯誤でつくりあげてきたノウハウを自分のものだけにしておくことで他との競争力を保つことができると思えるのはやめた方がよい。どこかの誰かが地域課題の解決に必死にもがいている時に、自分のノウハウを盗めるようにしておかなければならぬと思うのだ。そうやって盗み合うことで社会が少しでも良くなればと。

ただ、盗めるように返すのも力がある。まず、自分のトライを「方法論化」しなければならない。そのためにはやったことを客観的に分析することが必要になる。さらに、やったことを羅列するのではなく、その中から汎用性のあるポイントを抽出して方法論としなければならない。そうは言っても多忙な日常でそのようなことはなかなか難しのはわかる。せめてトライしたことのレビューを公開することぐらいは心がけたい。